島県立図書館蔵

安永８年の桜島噴火

桜島は、和銅元年（708）から現在まで数十回の噴火記録がある日本で最も代表的な活火山である。岩質は安山岩で、噴火は激しい爆発型であるが、溶岩流もよく出す。

安永８年（1779）の噴火は、文明３～８年(1471～76)・大正３年(1914)の噴火と並んで、３大噴火の１つといわれている。この時は、付近の海底からも噴火して、燃島をはじめ数個の新島ができた。噴火による津波も発生して、死者153名を出し、桜島の数ある噴火災害の中でも最も被害の大きなものだった。

最近では、昭和30年11月から爆発型噴火を始め、24年後の現在でも、なお激しい爆発を続けており、記録されている主な爆発だけでも三千数百回を数えている。

（気象庁地震観測所・諏訪　彰）

この絵の作者木下逸雲は、長崎の南画家であり、土佐絵もよくしたといわれる。彼が生まれたのは、1802年(享和２年)、安永の桜島噴火から23年後である。

鹿児島に来た逸雲が、桜島を見、人々の話を聞き、噴火の模様を想像して書いたものである。（編集部）